

神山のいま、むかし

広野編

●制作・発行

神山つなぐ公社

〒771-3311

徳島県名西郡

神山町神領字本野間100

TEL 050-2024-4700

「自分たちの村の由緒に誇りを
持っていたのでは、と思います」



▶行者野の川原での光景（年代不明／写真提供
みんなでうどんを食べている様子とのこと
阿津満屋製菓）

私たちの住む神山町は、1955

年に5つの村（阿野村、鬼籠野村、神領村、下分上山村、上分上山村）が合併してできた町です。それ以前にも、阿野村は阿川と広野が合併して、下分上山村は下分上山と左右内が合併してできたという歴史があります。各集落は、鮎喰川の本流・支流でつながっており、神山町の町域はその流域と重なります。

合併して70年近くが経った現在でも、7つの地区の特徴は残っており、季節の行事や風習、産業など、地区ごとに様々な文化が息づいています。

歴史研究家・高橋啓さん（神山町神領在住）とともにまちに残る史料を読み、まちに長く住む方々のお話を伺うことで、各地区がこれまでどういう歩みをしてきたかを辿りました。手がかりとするのは、高橋さんが監修として携わった『神山町史』をはじめ、旧村史など。さらに、スタンフォード大学図書館に所蔵されている古い時代の地図も活用します。



多くの記録資料が地域に残っているのは、自分たちの住む場所を「記録しよう」「見つめなおそう」という気風があったのだと受け取っています。自分たちの村の由緒に誇りを持ち、アイデンティティをもっていたのではないか、と思いますね。

（高橋啓さん談）

古い史料を現在生活している私たちが読み、そのような史料には書かれていない「生活者としての目線」を記録として残してゆきたいと思っています。

この瓦版は、WEBサイト「イン神山」に特集として公開した記事を編集したものです。

旧阿野村に属する、広野。鮎喰川の下流に位置し、須賀山を望む五反地や、夏には川遊びを楽しむ人の姿が多く見られる高瀬などの地域があります。また、四季の植物を楽しめる神山森林公園など、神山町の入り口として多くの人が訪れます。



後藤広輔さん（妻 貴美子さん）
齒ノ辻出身・在住／昭和15年生まれ

広輔 私らの住んでいるのは広野の齒ノ辻。ほたら、ここは元は阿野村っちゅうてな。周りの村と合併して、神山町の広野になった。

ここから神領っちゅうたら、16キロぐらい距離があるんよ。徳島市に行くんも、15キロで同じくらい。神山町の奥に行くっていうと、この辺りと同じくらい辺ぴなところへ向かう印象になるけん、何かここに無いものを求めるとなると、どうしても徳島市を向くようになるわな。

豊富だった

広野の川の恵み



▲昭和62年頃、神山森林公園の敷地整備中の様子

広輔 ここらへんにゴルフ場ができる前には山田という田んぼがあった。そこへ「カーバイド」っていう道具を持って、夜に行くんよ。ガスの燃料に石みたいなん入れたら、発光するやつなんじゃけど、灯りの代わりになつてな。

ほしたら灯りに驚いて、うなぎが出てくる。それを、二股に分かれとる小さいクワでちょーんと挟むんじゃわ。上手な人は頭のちようど首根つこのところへ引つ掛けて捕まえる。谷を通じてウナギはい上がっていったんよ。子どもながらに自然ちゅうもんはごっついなあと思ったね。

貴美子 私が人から聞いた話ではね、長谷（ながたに）から川が合流する谷のところへ9月の月夜の日にカニを獲りに行く。うちは獲りに行かんかったけん、獲りに行った人がよう分けてくれた。それと、昔は今のような川でなかったらしいね。もっと水量が多くて、子どもたちは魚突いたりしよったってね。



▲昭和46年の行者野水泳場（提供_阿津満屋製菓）
学校にプールが無く保護者が交代で見守っていた

広輔 アユでも、わしらは川に入って追いかけるんよ。ほしたら、目の前で川から河原へ飛び出してな。そんな遊びもしよったわ。捕まえたじゃこって魚を几帳面に串に刺して焼いてな。もう何串もこしらえるんじゃわ。他にじんぞくやでも、いろいろな食べ方が出来るくらいによけ獲れよった。美味しかったかはあんまり覚えてないけど、腹が減ったったけん。笑

齒ノ辻に母が創った、

私設の和洋裁学校

広輔 母親がな、戦後の一時期に学校の運営をしよったんよ。和洋裁縫女学校を。たしか、上分の川又や金泉から通いよった人もおったんちゃうかな。徳島や石井へ通うには遠いし、お金もよけ要るでえな。

貴美子 昔は嫁さんに行くのに、着物が縫えなかつたらあかんかった。料理ができなかつたらあかん、とは言われんのよな。でも、着物が縫えるようになつたらあかん。その頃はミシンがそうそうないだろ。今みたいに服売りもおらん。結局は、衣服にしろってお布団にしたって、みな自分で仕立てた時代やね。



▲後藤和洋裁縫女学校の集合写真（年代不明／提供_後藤広輔）

次に訪ねたのは、行者野橋のたもとにある「ワインフードショッピミヤ」を営んでいた宮田さん夫妻。ご近所に暮らす坂東さん兄弟とともに、賑やかな座談会が始まってゆきます。



(左から)宮田良子さん／坂東安治さん／宮田武二さん／坂東次雄さん 行者野在住

武二 家は「ワインフードショッピミヤタ」ってお店で、日用品や食料品、酒なんかを販売しおった。もとは旧道沿いにある、その頃は飲食業もおったで。米屋もな。

良子 主人が外に働きに出た後も、うちはお店をしようた。パートさんを雇うて、うちは中央卸売市場へ仕入れに行つて。もんできたら(戻ってきたら)、袋に入れて棚に並べて、をほとんど毎日繰り返してな。

武二 店の創業は、わしが子供だった頃だと思ふからだいぶ古いのう。お

ばあさんが手伝いをしようたのを覚えとるけどな。旧道沿いから、終戦後に今の場所に移つて始めたらしい。

安治 ほうやな。終戦後2年くらい経つて出来ようた。それまで畑を埋め立てたり段取りしてな。その頃は今の県道がまだなくて、お店のすぐ裏の鮎喰川寄りの道が、本街道やつたな。

武二 仕入れしたりするには、今の徳島市内の方やないと問屋が無いからでkindな。わしも学校へ行くときに、かごを持って行つて、戻りしなに仕入れしようたことがある。

良子 今は問屋さんが来たり、配達してくるようになったけど、終戦直後はそうじゃなかっただろうけん。だんだん道路も良うなつて、車で早く移動できるようになつたけど、自転車や歩きの時代は、行人やがちやうどこの辺(行者野橋周辺)でうどんを食べたり一服しようたみたいやな。

製材業を支えた

馬車引きの仕事

安治 うちの親父は馬車組合の組合長をしようた。お使いを頼まれたら自分も一宮まで40分かけて橋を渡つて、

走つて行つて。親父に「今日は早う学校から戻つてきて行つてこいよ」って言われるで。ほれがもうしんどいんよ。しんどかつたけど、行つたら行つたで、お菓子くれるんよ。「僕、よう来てくれたなあ」つちゆうて、ほれが嬉しいために行きようたな。

阿川の二宮八幡神社のお祭りには、何回こそ行かされたか。馬のお祭りやけん、親父が馬車引きしとつたら、しやあないけどな。



▲広野での製材に関する写真(詳細不明/参考)

次雄 うち「新宅」っていつて、本家に対する分家みたいなもん。だから田畑も農業だけで食つていけるほど多くなかつたんよ。兼業で馬車引きをしてな。今でいうところの運送屋のイメージ。馬は3頭おつた。引く人を雇つたりして材木なんかを運んどつた。

それで稼いで、田んぼを買つたりしてたな。

神山は材木がええけん、神領や鬼籠野へ行つたりして、製材した木を運んどつた。製材業者は馬なんか持つてないけん。うちみたいな馬車引きが、徳島まで運ぶ役を担つていたんよ。

——今回、昔のことを思い出してみていかがでしたか？

次雄 東京に働きに出ていた時期があつて、それはそれで面白かつた。でも、神山に帰つてきた選択は良かつたと思つて。仕事があるとか、いろんな問題もあつたけど、帰つてきてからいろんな人に声を掛けてもらえたり、神山の環境は断然いいなと思ふね。

良子 みんなで話すといろいろ思い出すな。みな、よう覚えとるね。「昔のことなんか、誰が興味あるのかな？」つて思つてたけど、自分の子どもや、もつと下の世代は、地区の歴史やら文化やらを知らない子が多いで、ほなけんこそ、伝え続けたり、変化が激しい今やこれからのことも残していかないけんと思ふな。

取材日2023年2月3月頃

もっと聞きたい！

広野のあんな話、
こんな話、

本編で取材させて
いただいた方々とは、
猪子さんご紹介が
あって出会うことが
できました。広野・

いのこのりやす
猪子徳保さん(71)

阿野橋のたもとで生まれ育った猪子さんが、子ども時代で印象に残っているのはどんなことでしょうか？

大雨のあと家のすぐそばにある川で遊んでいると、映画のフィルム缶が流れ着いていることがあったんですよ。近くの映画館で誰かが放ったんだろうな。砂を取り除いて、綺麗に洗って。ほれで飯を炊いたり、魚を焼いたりして食べて。家に帰らんと、一日遊んだこともあったな。

映画の話で言うと、上映される作品のポスターを店先に貼ると「ビラした」って割引券をもらえた。それを使ってよく見に行っていた。テレビもなかった時代の娯楽やね。



▲幼少期の猪子さん(左)
実家で経営していたうどん屋さんの店先にて。扉に貼られているポスターに映るのは、一世を風びした俳優「伴淳三郎」

読んでみての

感想や思い出されること、
ぜひ、聞かせてください。

記事に登場いただいた方だけでなく、事前の取材から多くの方にお話を聞かせていただきました。大変感謝しております。

そこに暮らしてきた人の数だけ、それぞれの生活がありその土地での記憶があり。記事としてお届けできた内容は重ねてきた歴史や文化のほんの一部と感じています。

まだ出会えていないみなさんの広野で過ごした時間について、ぜひ、聞かせていただけませんか？記事を読んで感じたことや思い出されたこと、今や未来にその地で暮らす人に伝えておきたいこと。どんなことでも構いません。お手紙にしたためて、お寄せいただけると幸いです。大切に読ませていただきます。

送り先 神山つなぐ公社 特集編集部 行

〒771-3311

徳島県名西郡神山町神領字本野間100番地



「イン神山」にて

記事の全文を公開しています！

本紙（瓦版）は、WEBサイト「イン神山」で公開している記事の一部を抜粋してお届けしています。紙面には載せきれなかったお話や、ほかの地区で伺ったお話もイン神山にて順次公開しています。

WEBサイト「イン神山」は
こちらから

* 他地区の瓦版も希望があればお渡しできます。
お気軽に「神山つなぐ公社」の畔永（くろなが）までお問い合わせください。

編 | 集 | 後 | 記

神山つなぐ公社 畔永由希乃

行者野橋のたもとにある「ワインフードショップミヤタ」さんは、いつも石井町へ向かうときに目に留まるお店でした。「今も営業しているのだろうか？」「何が売っているのだろう？」気になるけれど、お店に立ち寄る機会はなく。今回、取材先として訪問させていただけると決まったとき、とてもわくわくしたのを覚えています。

長年お店に立ち、お客さんを迎えてきた良子さんのお話はとても印象的でした。

昔は店先に自動販売機を4〜5台置いていたため、「宮田さん家のところでジュース買ってきて」と言われお使いにくる人がいたり、店先で話こむ人が多くいたり。悪さをする子を叱ることも多かったのでも「宮田さんによく怒られたわ」と話す人が、いまでも広野や石井町にはいるのだとか。

数々のお話からは、お店が、この地で暮らすひとの日常に当たり前に存在し、ひととひととの関わり合いを生む場所だったことを感じました。

取材後にふたたび、お店の前を通過するとき考えていたのは「宮田さんご夫婦は元気かな」ということ。今回の出会いをきっかけに、また新たに町の中で思いを馳せてしまう場所が増えました。取材をするたびに、大切に思う場所が増えていくのですが、定期的に会いに行ったり、連絡をしたり、やはり自分にできることには限りがあります。全てを大切にしたいですが、生まれたご縁を大切にこの町での暮らしを繋いでいきたいです。